

## 目次

プロローグ	6
第一章 残業はやめなさい	14
第二章 早く帰りなさい	33
第三章 闇残業はやめなさい	80
第四章 社外残業はやめなさい	111
第五章 残業禁止はやめなさい	150
第六章 無駄な会議はやめなさい	162
第七章 仕事は頼みやすくしなさい	186
第八章 誰かを助けなさい	208
第九章 おせんべいを配りなさい	237
エピローグ	255

社員各位

「残業禁止コンテスト」のお知らせ

各部署で退勤時間を競う「残業禁止コンテスト」を開催する。

〔開催日〕

六月二十日 水曜日（ノー残業デー）

〔参加対象者〕

全社員参加とする。ただし、部長職以上、パート、アルバイト、製造部の社員は除く。

〔ルール〕

一、総務部、マーケティング部、商品開発部、営業一課、営業二課、営業三課の計6チームによる団体戦とする。

一、各チームの社員の平均退勤時間を算出。最も早い平均退勤時間を記録したチームを優勝とする。

一、タイムレコーダーから近い部署には時間に十秒のハンデを与えて、距離に関係なく、平等に審査を行う。

以上

## プロローグ

業務終了十分前。

みなみのあかね 南野茜は机の下でパンプスから運動靴に履き替えた。

準備万端。仕事は十五分前に片づけて、荷物はバッグに詰め込んでいる。そのバッグも今日に限ってデイパックだ。全力で一階のタイムレコーダーまで走り切るのであれば、トートバッグよりもデイパックのほうが走りやすい。

気づくと手が汗ばんでいた。心臓が高鳴る。タイムカードを一番早く押すというバカバカし過ぎるイベントだが、いざスタート前になると緊張で身体が強張る。

作戦通りうまくいくのか。それとも、途中でずっこけて失敗するのか。

隣の席の毛塚典史と目があつた。黒縁眼鏡の中にある目玉がぐるぐると泳いでいる。「落ち着いて」

南野が小声で言った。毛塚が顔をこわばらせて首を縦に振る。

誰の目から見ても緊張がピークに達しているのが分かる。無理もない。十七時の終業チャイムと同時にエレベーターを停止させることができるのは、社内のセキュリティシステムを把握している毛塚しかいない。妨害工作がバレたら始末書ものだ。しかし、エレベーターを止めなければ残業禁止コンテストで我がマーケティング部が一位を奪取することはできない。どこの部署の社員よりもいち早くタイムカードを押すためには、皆が乗り込むエレベーターを止めるしかないのだ。

「大丈夫よ」

南野の言葉に毛塚が再びコクリと頷いた。

毛塚のことは部下として信頼している。面倒見がよくて行動力もあり、周囲からの人望も厚い。社内であった一人のシステムエンジニアとして、貴重な人材であることは間違いない。今回もきつとエレベーターを止めるという危険な任務を確実に遂行してくれるはずだ。

しかし、毛塚は仕事の詰めがいつも甘いところがある。

良い意味で男気があるが、悪い意味でいい加減だ。どんなシステム構築でも「任せてください」と簡単に引き受けてしまうが、その仕事が期限以内に終わったためしない。理由を尋ねると「バグが発生した」と必ず言い訳をする。そして出来上がったシステムでバグが発生すると、今度は「こういう仕様のシステムだ」と言い張る始末だ。持ち前の明るさと気立ての良さで、仕事のいい加減さは他部署には浮き彫りにならないが、そばで仕事をする者にとったら、このアバウトな仕事ぶりが、気が気ではなかった。

視線を正面に座る香田洋一に動かした。

今回の残業禁止コンテストのルート設定は香田が一人で考えたものだ。今は何食わぬ顔でパソコンを覗き込んでいるが、おそらく頭の中では最上階の三階から一階まで駆け下りるシミュレーションを何度も繰り返しているはずだ。こんなバカバカしいことを真剣に考えられるのは社内では香田しかいない。誰も思いつかないようなキテレツなアイデアを出させたら、ピカイチの才能がある。

しかし、香田はひとつのことを考えると、他のことにまったく気がまわらなくなってしまう難点があった。

つい先日、展示会で配布するカタログの作成を頼んだが、作ることに熱中するあ

まり、印刷することを忘れてしまい、展示会に手ぶらでやってくるという信じられないミスをしてかした。

会議にサンプル品を持ってくるよう指示を出すと、サンプル品は持参するけど資料を忘れてきたり、取引先で夢中になり過ぎて話が止まらず、先方から「なかなか帰ってくれない」と泣きの電話が入ったり、社会人として理解できないような常軌を逸したミスを連発する。

そういえば一週間前も、新宿のPR会社との打ち合わせの帰りに、考え事をして八王子に行ってしまったという電話を香田から受けた。どんな考え事をすれば八王子まで気づかないのか。しかも、乗っている電車は会社がある方向と逆方面だ。

そんな香田が考えたのが、今回のタイムカード早押し作戦だ。社会人としての能力はゼロに等しいが、今は彼のアイデアに賭けるしかない。

業務終了五分前。

鼓動が速まってきた。残業禁止コンテストがどれだけ無意味なことなのか百も承知だ。しかし、このコンテストでマーケティング部が優勝すれば、お荷物部署とバカにしてきた奴らを見返すことができる。

斜め前の席に目をやると、飯尾海斗が書類を整理していた。親会社であるハマヤ水

産から出向してきた部長である。二十九歳。私よりも二つ若い。ここ数日の私たちの不審な行動をみて、何かやらかすのではないかと察しがついているはずだが、なぜか見て見ぬふりをしている。敵か味方かは分からないが、この社員も一時の出向だと思って子会社である亀岡堂のことなど真剣に考えていないのだろう。

業務終了一分前。

南野は毛塚と香田と視線を合わせた。今はもう何も考えるな。残業禁止コンテストの優勝だけを考えよう。大丈夫。作戦通りにやればマーケティング部の優勝は間違いない。

終業のチャイムが鳴った。

同じフロアにいる営業部の社員たちが一齐に出口に向かって走り出した。しかし、一番出口から遠い南野たちは、真逆にある非常扉に向かって走り出した。

「お前らどこに行くんだ」

背後から飯尾の声が聞こえた。南野は無視して非常扉のノブに手をかける。三人は勢いに任せて表に飛び出すと、古びた非常階段を猛スピードで駆け下りた。二階の非常扉をあけて再びビルの中に入る。滅多に使わない非常階段なので、他部署の社員からはノーマークのルートだ。

「エレベーターが動かねえぞ！」

ビルの中に入ると三階のフロアから怒声が降ってきた。正面に目を向けると、二階フロアの総務部と商品開発部が猛ダッシュで向かってきた。鼻の穴を大きく膨らませて、左右に手を大きく振り回す姿は、メダルを狙う短距離走選手そのものだった。

「……マジじゃん」

毛塚が立ちすくむ。

「ポーションしないで！」

南野の叫び声に毛塚が我に返る。三人は急いで階段を駆け下りて踊り場に飛び込んだ。南野が階段の手すりに手をかけて内側を回り込む。その隣の毛塚は南野の腕を掴み、一番外側の香田は毛塚の腕を掴む。三人が一列になって遠心力を使ってきれいな弧を描きながら踊り場でターンした。

「完璧だわ！」

この踊り場の回り方でタイムがコンマ三秒変わってくる。三人で会社に残って一番練習したのが、この踊り場の回り方だった。

しかし、回り切ったところで南野の腕に衝撃が走った。

「痛ってえ！」

香田が派手にすっ転んだ。しかめっ面をして足を抱え込む。あんなに何度も練習したのに、なぜ、本番でお前は転ぶんだ！

「いったあ〜」

足をさする香田。その呑気な姿に南野の頭の中でカチンと音が鳴った。

「立ってええええええ！」

南野は大声で叫ぶと、香田の手を思いっきり引っ張り上げた。ふわっと浮いた香田を毛塚が力強く押した。

三人は階段を駆け下りて一階のフロアに飛び出すと、今度は廊下の脇に積み上げておいた空の箱を次々になぎ倒しながら走り始めた。

「なんだこのダンボールは！」

叫び声が聞こえてきたが、南野たちはその声を無視してタイムカードをわし掴みにした。

ガチャン。

“退”の欄に「17..02」と刻印された。

「新記録ですよ！」

毛塚が南野に駆け寄ってきた。香田は南野に引っ張られた手が痛かったのか、右腕

を押さえて苦笑いをして立っているだけだった。

その後ろで社員たちがダンボールをかき分けながら、悔しそうにタイムカードを押していく。

南野が喜んでいると、遠くからじっとこちらを見つめる飯尾と目があった。南野は鼻の穴を大きく膨らませながら腕を組んで近寄っていった。

「私たちもやればできるんですよ」

飯尾は「そしてみたいだな」とニヤリと笑った。

「何がおかしいんですか」

「いや、別に」

飯尾は再び階段を上っていった。その後ろ姿を見て、南野は「なんなのよ、あいつ！」と、目の前に転がっているダンボールを思いっきり蹴飛ばした。

## 第一章 残業はやめなさい

二ヶ月ほど前、飯尾は執行役員の楠木紘一くすのきこういちに呼び出されていた。

「出向、ですか」

飯尾は表情を歪ゆがめた。

「俺、なんかやりました？」

「話は最後まで聞け」

楠木は飯尾を椅子に座らせた。

「過去に何度かうちの会社の人間が出向しているんだよ。だけど、業務改善がうまくいなくてな」

「なんでうまくいかないんですか」

「管理部の人間が出向するからだろ」

飯尾は合点がいった。残業を認めないのに早朝出勤を黙認したり、業務の効率化を

謳うたいながら、いまだに紙ベースでハンコが必要だったり、現場を知らない管理部の業務改善策はストレスが溜まる一方だった。

「今度は現場をよく知ってる人間を寄せという要請があったんだ」

「俺だってよくわかりませんよ」

「そうキリキリするな」

楠木は笑った。

飯尾と楠木は、もはや腐れ縁のような仲である。もともと二人は殿山とのやま缶詰という小さな缶詰メーカーで働く営業マンだった。上司と部下の関係で、その後、殿山缶詰はハマヤ水産ホールディングスに買収され、社員は製造部を除くほぼ全員が転籍となった。しかし、飯尾と楠木はハマヤ水産に移るとすぐに業績を伸ばし、社内でも一目置かれる存在となった。今では飯尾が最年少の課長へと昇進し、楠木も執行役員まで出世した。飯尾にとって楠木は上司でもあり、戦友でもあった。その戦友から別の戦地にお前だけ行けと言われるのは、心外な思いもあった。

「業務改善なんてできませんよ」

飯尾は「働き方改革」という言葉が好きではなかった。労働時間を短くした上で、さらに業績をあげていくのは無理な話だと思っていた。例えるのなら四十五分

でやっていたサッカーの試合を三十分に短縮して、今よりも点数をたくさん入れるといっているようなものである。

「働き方改革なんて子会社に勝手にやらせればいいんですよ」

飯尾は口をひん曲げた。

「そもそも、なんでその会社は残業時間の削減にそんなにこだわるんですか。仕事がちやんと回っているんだったら、それでいいじゃないですか」

「向こうにも残業を減らしたい事情があるんだろ」

楠木は口元に手をあてた。

「今やどこの会社も労働環境の改善に取り組んでいる。ネットの口コミサイトでブック企業のレッテルでも貼られたら、それこそ本社の採用にまで影響が出てしまう」

飯尾は「まあ、そうですけど」と声のトーンを落とした。

「親会社のハマヤ水産だって働き方改革がうまくいっているほうじゃない。図体がでかい組織だから、細かい施策はほとんどできていない」

楠木は飯尾に顔を近づけた。

「だからお前に子会社に向向してもらって、働き方改革を成功させてもらいたいんだよ。そうすればハマヤ水産に戻ってきたときには、本格的な労働環境の改善策を実践

することができるだろ」

今回の出向の話を楠木が親心おやこころで持ちかけてきたことを飯尾は察した。

課長までは上り詰めたものの、ここから先の出世は不透明だ。部長に昇進できるのは課長職のうちの三分の一もない。しかし、ここで子会社に出向して、働き方改革の実績を手土産に本社に戻ってくることであれば、部長への出世レースに食い込むことができるかもしれない。

「ちなみにその子会社は」

飯尾は話だけでも聞いてみようと思った。

「昨年買収した亀岡堂だ」

「おせんべい屋の？」

「米菓メーカーといえ」

楠木が困った顔をした。

社内報でせんべいやあられを作る会社を買収したことは知っていたが、詳しいことは何も分からなかった。缶詰と冷凍食品の営業しかやってこなかった飯尾にとって、米菓は関心すらない商品だ。

「安心しろ。コンサルタント会社から専門家を派遣する手はずにはなっている。その



人と一緒に労働改善に取り組むことになるから、仕事が全て押し付けられるわけじゃない」

飯尾は考え込んだ。

ここで断ってしまうと、今回の出向の話を引っ張ってきた楠木の立場がなくなってしまう。少しでも自分の荷を軽くするためにコンサルタント会社まで手配したのに、それを断るのは仁義に反することになる。

「やってくれるか」

楠木の問いかけに飯尾は「分かりました」と抑揚のない口調で返事をした。

亀岡堂は埼玉県美里市にある老舗の米菓メーカーである。

二代目社長の亀岡光太郎に事業が引き継がれてからは、新しくあられの生産体制を整えたことで、全国の百貨店から引き合いがくるようになった。

しかし、三代目の亀岡荘太郎に事業が引き継がれた時、「地元のお客様をもっと大切にしよう」というスローガンが掲げられた。美里市の商工会議所の会頭を務めていたこともあり、先代よりも荘太郎は地元愛が強く、地域の人に亀岡堂のせんべいやあられを食べて欲しいという思いが強かった。

工場のすぐ脇に小さな直売店を建てて、そこで定期的に即売会やイベントを開催した。

その時に生まれたのが、今の亀岡堂の経営を支える看板商品「かえるせんべい」だった。当時、四方を川に囲まれていた美里市にはこれといった名物がなかった。周囲は田んぼに囲まれて、夏になるとたくさん蛙が鳴くことから、荘太郎が蛙の顔の形をしたせんべいを考案した。

その愛らしい表情のせんべいは地元客の心をすぐに掴んだ。口コミで評判が広まり、地元のスーパーや駅の売店でもかえるせんべいが販売されるようになった。気づけば「美里市しかえるせんべい」と地元の名産として認知されるようになった。

その後、工場直営の店舗は小さいながらも常に客で溢れ返り、現在も美里市にはこれといった名物がないことから、地元企業のサラリーマンや主婦などがかえるせんべいを土産として利用している。

だが、荘太郎が急死して、四代目の亀岡俊太郎が会社を引き継いでから状況が一変する。

会社の経営に興味のなかった俊太郎は、中学校の教員の職に就いていたこともあって、経営のセンスはまったく持ち合わせていなかった。広告代理店に乘せられてテレ